むさしの TALK

魅力的なまち、だからこそ広い視野でまちづくりを

麿 赤兒さん

個性派俳優であり、舞踏カンパニー「大駱駝艦（だいらくだかん）」の主宰者である麿赤兒さん。第一線を走り続ける舞台人にとってこのまちの魅力をお聞きしました。

活動拠点だった新宿を離れ、吉祥寺に移って来てもう16年。僕は稽古場に近いところに住みたいタチだから、自宅も一緒に移し吉祥寺で生活しています。引っ越した当時は、新宿を離れて寂しくて仕方なかったし、どこにいても自分をよそ者のように感じて落ち着かなかったけれど、いつの間にかこのまちになじんでしまっていたね。

人って喧噪（けんそう）に紛れたいときと離れたいときの両方があるでしょう？新宿は、喧噪から離れたいときは街を出るしかなかったけど、吉祥寺はふらっと散歩すれば、喧噪と静けさの中を行き来できる。商業地と緑豊かな場所が隣接しているところが、このまちの良さだね。自分では"地回り"と称して…風貌がこれだからシャレにならないかな（笑）、まち歩きしながら、店の移り変わりを観察して店が長く保てる方法を考えたり。自分で店を持つことはないけど、考えてしまうね。実は、いろいろ考えちゃうタイプなんですよ、僕は。

武蔵野市が良いまちであることは確か。これからもこの愛するまちを拠点にしていくからこそあえて言いたい。以前、広い場所で舞踏稽古をしたくて、体育施設を借りたとき、使用目的と合わないという理由で使用できなかったこともあったから、できれば柔軟に対応してくれるとうれしい。何かを生むために、自由に使えるスペースを提供することは自治体にとって大切なことだと思う。若者から年配まで、幅広い世代が暮らすまちだから、調整することがいっぱいあるだろうけれど、これからも安心して暮らせるまちづくりをベースとしながら、さまざまな要望に応えていく、度量の広いまちであってほしいと願っています。

麿 赤兒（まろ あかじ）

1943年生まれ。俳優・舞踏家・演出家。1962年、舞踏家の土方巽に師事し、唐十郎の劇団「状況劇場」に参加。1972年、舞踏カンパニー「大駱駝艦」を旗揚げ。天賦典式（てんぷてんしき）と名づけた独自の手法で、海外で大きな話題を呼び「BUTOH」の名を世界に広めた。今年8月3日、大駱駝艦公演「黄金の夏」を長野県白馬村の野外会場にて上演予定。

PRESENT

今回取材した、麿赤兒さんの直筆サイン本を抽選で5名様にプレゼント！ 詳しくは本誌折り込みハガキをご覧ください。